

Title	The Great Gatsby にみられる Romanticism : "The Eve of St. Agnes"との比較を中心に
Author(s)	平井, 智子
Citation	Osaka Literary Review. 35 P.106-P.118
Issue Date	1997-02-10
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25380">https://doi.org/10.18910/25380</a>
DOI	10.18910/25380
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# *The Great Gatsby* にみられる Romanticism —“The Eve of St. Agnes” との比較を中心に—

平井 智子

## I

Fitzgerald の批評において、*The Great Gatsby* の主人公 Gatsby と *Tender Is the Night* の主人公 Dick Diver は、頻りに比較され続けてきた。しかし、両者が対等な関係に併置されることは少なく、概して、Dick は「英雄」Gatsby の引き立て役として扱われ、「Gatsby は偉大な英雄であるが、Diver を英雄と呼ぶことはできない」という意見が主流となっている。表面的に両者の生涯をとらえるなら、Gatsby は成り上がりの密造業者、Dick は自己犠牲により精神分裂症の女性を回復させた精神科医であり、どちらかといえば、Dick にこそヒーローの名がふさわしい。それを覆すような、Gatsby の英雄性とはいかなるものであろうか。

最近の Gatsby 批評の多くは、Gatsby をとりまく外的世界に焦点をあてている。とくに90年代に入っては、たとえば、資本主義経済の興隆、大都市の機能、性の境界の解体などについて、緻密で示唆的な論文が発表されている。つまり、Fitzgerald 作品を論じる際のもっともポピュラーな二項対立である「夢と現実」の、「現実」の側面が注目されている、といえる。これにたいし、本論は、「なぜ Gatsby は英雄と呼ばれるのか」という出発点に明らかなように、Gatsby の内的世界、すなわち「夢」の面に目を向ける。ただし、これは、現在の潮流に否定的な意図によるものではない。*The Great Gatsby* という作品の醍醐味は、あくまでも「夢」と「現実」のふたつの世界のせめぎあいにある。現在「現実」が鋭く論じられている反面、「夢」の部分は、5、60年代の批評で「アメリカン・ドリーム」の一言で片づ

けられたままになっており、Gatsby の英雄性についても、「アメリカン・ヒーロー」という言葉のもとに不問にされている感がある。もちろん、Gatsby という人物を包括的に論じるなら、Hawthorn 以来のアメリカン・ロマンスの流れは無視できないが、ここでは、あえて、「アメリカ」という枠組みの中ではとらえられない Gatsby の英雄性を考えてみたい。

Gatsby が「現実」とはあらゆる点で対照的な「夢」を体現した人物であることは、伝統的なものから非常に今日的なものまで、あらゆる批評において、つぎの一言で表現される。すなわち、‘romantic’ である。以下はその数例である。

Almost predictably, the object of Gatsby's romantic quest, Daisy Buchanan, comes to us in a double way.<sup>1</sup>

If the object of his affection was shallow and false, his love was deep and true. His romantic love confronts reality and leads to his destruction.<sup>2</sup>

In this way Gatsby's romantic vision of Daisy is given universal validity as an act of the creative imagination.<sup>3</sup>

また、本文中でも、Nick が読者に初めて Gatsby を紹介する箇所に romantic という言葉が使用され、‘romantic’ は主人公 Gatsby を端的に表現するに有効な形容詞として、まるで呪文のように唱え続けられている。しかしながら、この言葉があまりに多用され、「Gatsby=romantic」の図式が固定される一方で、romantic という言葉の意味はあまりに多様で、Gatsby という人物はこのとらえがたい言葉に遮られ、ぼんやりと霞んでいる。

OED による ‘romantic’ の定義は、「1) 冒険と恋をモチーフとしたロマンスのさまざまな特性をもつ」、2) 以下はそこから派生したもので、「2) 非現実的な、3) 日常や実用性を超えている、4) imagination と深い関連性

をもつ、ロマン主義の流れをくむ」となる。批評家の中では Richard Lehan が、‘romantic’ の比較的明確な定義付けをしている。（“The romantic unfolding of self is inseparable from the romantic belief that the universe is alive and that fulfillment is a process of growth.”<sup>4</sup>）さらに Lehan は、Keats の Ode に謳われた Nightingale を喚起する言葉を Daisy が用いていることから、「Daisyこそが Gatsby の romanticism の中核をなす」と述べ、「Daisy を失って Gatsby の romanticism は消滅する」と結論づけている。ここに、「Gatsby は Keats 風の romantist であり、彼の romanticism をささえる Nightingale としての Daisy が去るとき、Gatsby の romanticism は reality の前に敗北する」という Gatsby 批評における定番の図式が見られる。しかしこれは、*Tender Is the Night* の批評でいわれる「Dick Diver は、作品のタイトルの出典となった Keats の ‘Ode to a Nightingale’ にあるような romanticism を追求しようとしたが、妻 Nicole に去られ、きびしい現実のなかで敗北する」にあまりにも似通っており、romantic な特質は Gatsby の存在の中心であるようにいわれるにもかかわらず、これをもってしては、Gatsby はヒーローであり Dick はヒーローではない、という両者の差異を証明しえない。

しかし、Gatsby の romanticism は、考慮に値しない程度のものであろうか。Lehan の考えるように、romantic な思考とは限りなく成長の信奉であるならば、この作品は終結部分に至るまで、そのような前向きな信念が貫かれているように思われる。

Gatsby believed in the green light, the orgastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that’s no matter — tomorrow we will run faster, stretch out our arms further... And one fine morning —

So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past.<sup>5</sup>

「Gatsby=romantist」という図式はさておき、Gatsby の romanticism と Daisy の連結に無理があるのではないだろうか。

## II

Gatsby の romanticism を論じるにあたり、本論でも Keats の詩を取り上げる。冒頭に上げた Parkinson の論に代表されるように、*The Great Gatsby* と Keats の詩が比較される際に取り上げられるのは、‘Ode to a Nightingale’ であるが、ここでは、Fitzgerald が、「Shakespeare を含めて英語で書かれたものの中で、最も豊かで、最も官能的なイメジャリーを含んでいる」と述べた ‘The Eve of St. Agnes’ との比較を行う。

まず注目すべきは、「無謀な求愛者が仲介者の手を借りて堅く守られた至高の女性を得ようとする」という両者に共通する枠組み、典型的なロマンスの原型である。Porphyro が城の奥に厚く守られた Madeline を手に入れるように、若き日の Gatsby は高値の花である女性、“High in a white palace the King’s daughter, the golden girl (p. 115)” と呼ばれる Daisy をわがものにしようとする。このあらすじがロマンスの型であるため、多くの批評では、ここまでのレベルで Gatsby を romantist としているのではないだろうか。興味深いのは、「Daisy に手を触れる権利がないからこそ彼女を手にいれた」と本文中にはっきりと述べられているように、Gatsby が自分の romantic な行動について意識的で、意図的にロマンスの型を実践しようとしている点である。

Porphyro は Madeline を求め屋敷の奥の彼女の寝室へ入り込むが、Daisy に対する Gatsby の情熱も、彼女の家にも、さらには、彼女の寝室にも、結びつけられている。

It[Daisy’s house] amazed him — he had never been in such a beautiful house before. But what gave it an air of breathless

intensity, was that Daisy lived there — it was a casual thing to her as his tent out at camp was to him. There was type of mystery about it, a hint of bed rooms upstairs more beautiful and cool than other bedrooms.... (pp. 141-142)

Daisy の人物像について、かつての批評では、彼女があまりにも興行きのない俗人であり、Gatsby の純情に値しない失敗作である、という意見が多く見られた。しかし、Gatsby は、Daisy の「人格」という近代的な概念の対象を求めているというより、娘を奪うため堅く守られた家に侵入するというロマンスの形式の踏襲を、Daisy に出会った当初から重視しているようである。

また、「富と愛という矛盾するものがこの小説の中心に存在する」という意見も従来あるが、このふたつの要素も Gatsby の romanticism にとってはそれほど相反するものではない。1918年のアメリカでは、中世イングランドのように禁断の存在として武力によって守られた処女など存在するはずはなく、それに相当するものは、財力によって貧しい若者から隔てられ、求愛者に取り囲まれている Daisy のような娘ということになる。

月の夜、人目を避けて恋人の屋敷の外にたたずむ Porphyroのごとく、Gatsby も月の光を浴びながら Daisy の家の傍らの茂みで、神聖なる見張りを続けている。

Beside the portal doors,  
 Buttressed from moonlight, stands he, and implores  
 All saints to give him sight of Madeline,...<sup>6</sup>

He[Gatsby] put his hands in his coat pockets and turned back eagerly to his scrutiny of the house, as though my presence marred sacredness of the vigil. So I walked away and left him standing there in the moonlight — watching over nothing.

(pp. 138-139)

自己をロマンスのヒーローに仕立て上げようとする Gatsby の romantic quest にとって、Daisyは恰好の獲物、Porphyroにとっての Madeline のような存在といえる。また、Daisyを守る固い殻、すなわち富という障壁を突き破る行為が、Porphyro のようなロマンスの主人公になるための不可欠な条件であれば、Gatsby の手段を選ばない金儲けは、十分に正当化される。

### III

このように Daisy をロマンスのヒロインになぞらえるのは、「Daisy に romanticism を付与しすぎると、Gatsby をヒーローとして位置づけることが困難になる」と述べたことと矛盾するようにみえるかもしれない。ここから、Gatsby が自らの romanticism を全うさせるにあたっては理想的な対象物である Daisy が、自身では romanticism を完全に体現することはできないという問題を、Daisy と Madeline の類似と微妙なずれをとおして述べていきたい。

まず、この Madeline と Daisy が奇妙に重なるのはつぎの点である。Gatsby が戦場に行ったのちの Daisy と彼女の周囲でくりひろげられるパーティの描写は、Madeline の屋敷で聖アグネス祭前夜に催される祝宴を連想させる。

All night the saxophones wailed the hopeless comment of the 'Beale Street Blues' while a hundred pairs of golden and silver slippers shuffled the shining dust. At the grey tea hour there were always rooms that throbbed incessantly with this low, sweet fever, while fresh faces drifted here and there like rose petals blown by the sad horns around the floor. (p. 144)

Full of this whim was thoughtful Madeline:  
The music, yearning like a God in pain,

She scarcely heard: her maiden eyes divine,  
Fixed on the floor, saw many a sweeping train  
Pass by — she heeded not at all:…<sup>7</sup>

Daisy の周囲ではにぎやかパーティーが開かれ、一晩中もの悲しい音楽が鳴り響き、華やかではあるが無個性でつかみどころのない人々、「床の上をあちこちと漂うバラの花びらのような」宴客たちが集っている。‘St. Agnes’ においても一晩中奏でられる調べが繰り返し描写され、豪華な装いをしたひとつの集合体としての宴客たち (‘revelry’) が、‘Numerous as shadows’ と描写されるように、華やかに、しかし、ぼんやりと Madeline のまわりを踊っている。この踊る宴客の様子は、双方ともにその足許に焦点を当てた描写になっている。また、宴果て眠る Daisy のベッドの傍らの床に脱ぎ捨てられた夜会服は、Madeline の寝室に忍び込んだ Porphyro が発見する ‘empty dress’ (空のドレス) を思い起こさせる。

さらに最も共通しているのは、Madeline が聖アグネスの奇跡によって、将来の夫の姿、vision を夢に見ることを切望するように、Daisy もまた自分の人生が決定され具体化されることを切望している。

And all the time something within her was crying for a decision. She wanted her life shaped now, immediately — and the decision must be made by some force — of love, of money, of unquestionable practicality — that was close at hand.

That force took shape in the middle of spring with the arrival of Tom Buchanan. (p. 144)

Madeline の夢の vision は、現実の Porphyro として文字どおり incarnate するが、Daisy の切望も、Katheleen Parkinson の指摘のように、将来の夫の出現に他ならず、Tom Buchanan という現実の男性として ‘take shape’ (具体化) する。

つぎに、この類似のかげにみられる Daisy と Madeline の差異をみてい



く。上記の引用にあるように、聖アグネスのまじないに心をうばわれた Madeline は、にぎやかな音楽も耳にはいらず、華やかな客たちの姿に目を止めることもなく、終始一心にその信念を貫く。いっぽう Daisy は、流行の音楽や華やかな人々に心を奪われて、Gatsby の帰還を待つ決心を捨て去る。さらに、Madeline が Porphyro と結ばれた直後、永久に消え去ってしまうのにたいし、Daisy は彼女の願いが Tom というかたちで具現化したのち、1922年という5年後の世界にまで存在し続けなければならない。

‘romantic moment’ とは、Madeline のように持続する imagination の強い力で現実を超えた vision を喚起し、自己をそれと同一化する瞬間のことではないであろうか。Keats の詩においては、この瞬間の後には殺伐たる real world への回帰が運命づけられているが、Madeline は、この瞬間の後この世界に長くとどまることをしない。imagination の力をもたず、vision の成就した後の世界にとどまる Daisy は、Madeline になりきることはできない。彼女は、Gatsby の romanticism を喚起する媒体となりえても、みずからが romantic な存在にはなりえない。Madeline と Daisy を比較すると、両者の重なる部分には、ロマンスのヒロインという外形の共有がみられ、その差異、つまり Daisy の失敗には、より深いレベルでの romanticism、内的経験として romanticism をもちえる能力の有無が見えてくる。

#### IV

‘St. Agnes’ において、もっとも romantic な人物とは、Porphyro でなく、強い imagination の力をもつ Madeline である。Daisy は Madeline になることはできないが、*The Great Gatsby* には Daisy と Madeline の差異をうめる他の人物が存在する。それは、主人公 Gatsby である。Gatsby と Madeline の類似は、つぎのような点にみられる。

聖アグネスの加護を一心に願い、横たわる Madeline は奇妙な、半覚醒

半睡眠状態に陥る。

Soon trembling in her soft and chilly nest,  
 In sort of wakeful swoon, perplexed she lay.  
 Until the poppied warmth of sleep oppressed  
 Her soothed limbs, and soul fatigued away,  
 Flown, like a thought, until the morrow-day;...<sup>8</sup>

Gatsby もまた、自分の将来についての突拍子もない想像を描きながら、このような ‘wakeful swoon’ を経験する。

The most grotesque and fantastic conceits haunted him in his bed at night. A universe of ineffable gaudiness spun itself out in his brain while the clock ticked on the washstand and the moon soaked with wet light his tangled clothes upon the floor. Each night he added the pattern of his fancies until drowsiness closed down upon some vivid scene with an oblivious embrace. For a while these reveries provided an outlet for his imagination... (p. 95)

Madeline の場合のようにベッドの傍らには脱いだ衣服、そして、Daisy の寝室には欠けていた、romanticism の象徴、‘St. Agnes’ では全編を通じ重要なモチーフとなっている、月の光、がここにある。

ところで、Gatsby における Madeline の夢の vision との同等物、彼の imagination が生み出した vision、彼がこれから自己と一体化すべき vision とは、いったい何であろうか。この vision の正体を Daisy とするところに、先ほど述べたような誤解が生じると思われる。

Daisy に出会うはるか以前、17歳の James Gats は、Jay Gatsby という名前を、そして、それをもつにふさわしい人物像を想像することによって、さきほどのような imagination にかりたてられた神秘的な瞬間、real と unreal が交錯する瞬間を経験している。Gatsby の vision とは、Daisy で

はなく、この Jay Gatsby という人物像ではないだろうか。Gatsby の生涯とは、この vision の具現化の歴史、自らがその vision を演じることに、つねに vision に形を与え自己を同一化していく過程であると思われる。

もう一点、Gatsby と Madeline の imagination の類似点として、宗教的な側面をあげておきたい。Bernard Blackstone は、‘The Eve of St. Agnes’ を括弧付きの romantic な詩と述べ、その根拠が ‘religious note’ (宗教的な色彩) にあるとしている。<sup>9</sup> 一方、Gatsby とは ‘God by’ (神の子) を意味し、Gatsby という vision の実現は神の意志の実現でもある。

He was a son of God — a phrase which, if it means anything, means just that — and he must be about His Father’s business, the service of a vast, vulgar, and meretricious beauty. (p. 95)

純潔の守護聖人に捧げた<sup>おとめ</sup>処女の祈りが肉体の愛へと昇華する不思議な融合が、Keats の romanticism を高めることはあっても傷つけることがないように、Gatsby の一連の奇妙な言動、世俗の美への奉仕は、彼の romanticism の中では神の意志からはずれることはない。両作品ともに、とすれば ‘vulgar’ になりがちな要素が宗教的な色彩と融合した romanticism がみられ、この点でも Gatsby を Keats 風の romantist と呼ぶことができる。

## V

それでも Gatsby を romantist と呼ぶことにたいしていくつか反論があるであろう。反論を仮想しながら、Gatsby による Keats 風の romanticism の成就を再確認する。

たしかに Gatsby の imagination が描き出す vision は、romantic と呼ぶには滑稽で見当違いなものである。Jay Gatsby という人物像は、三文

冒険小説から抽出されており、romantic がすぎて burlesque に転んだともいえる陳腐な面をもっている。にもかかわらず、最終的にはその滑稽さが払拭されるのは、前出の神の意志という正当化と、ロマンスの信奉の異常なまでの強力さ、intensity があるためである。

Gatsby は、自らがロマンスのヒーローになろうとするだけでなく、ロマンスにふさわしい舞台が現代に存在しないとすると、自らの手でそれを仕掛けようとする。彼は、Ronald Berman によれば、「曲解された中世ロマンスの非現実的な雰囲気醸し出す」という中世的なシルエットをもつ大邸宅を購入し、Madeline の館のパーティーのような盛大なパーティーを開催する。作品中で詳細に描写される二回のパーティーで、‘The Eve of St. Agnes’ と同様に真夜中に月が最も高く昇っているのも、Gatsby の徹底したロマンスへの執着を裏付ける。

Gatsby の死は、romanticism の敗北と読みとることも可能であるが、Madeline と Porphyro の館からの逃亡と同様に、romantic なものをうけいれない real world との決定的な決別ともいえるロマンスの主人公にふさわしい終末であり、romantic な vision の究極的な完成と考えることも可能である。

最期の場面で、月は高く昇り、Gatsby の屋敷の前に立つ Nick は、これも ‘romantic moment’ といえる、初めて新大陸と対面する船員たちの驚嘆の瞬間を思い描く。そして、「たとえ流れに過去へと押し戻されようと、その流れに逆らいながら前に漕ぎ続けていこう」と決心することで、Gatsby の romanticism を自らの内的世界にとりこみ、ここに両者の世界の融合が完了する。Gatsby の一連の行動が vision の具現化であるように、Nick の語りもまた当初は謎に満ちた主人公 Gatsby に肉付け (incarnate) していく過程といえ、この作品全体が Keats の詩にみられる、想像・具体化・一体化という一連の romantic な作用に乗っ取っていることがわかる。

Richard Lehan の批評は、そのタイトル ‘The Limits of Wonder’ に明らかなように、Gatsby の運命が敗北であること、夢が現実に、

romanticism が modernism に圧倒されることを、*The Great Gatsby* の主軸ととらえている。しかし、Keats の romanticism という観点から眺めるならば、*Gatsby* の一連の行動はあらゆる点で romantic な意図にささえられ、最終的にその romanticism は貫徹されている。段階的に追っていくとまず、その行動が形式としてのロマンスと一致する、それは偶発的なものでなく *Gatsby* 本人によって意図的に仕組まれている、このロマンスの主人公たるべき Jay Gatsby という人物は romantic moment に生成された imagination の産物、すなわち、vision である、身を持ってロマンスを実現させるとはその vision に自己を同一化させることであり、最終的に *Gatsby* と Nick の共同作業によって Jay Gatsby という vision が結晶し、‘*The Great Gatsby* は romantic の側に傾いている、と考えられる。

*Gatsby* は時代遅れの romanticism を保持し続けた最後の romantist であり、最終的に自らのうちに沸き起こる笑いにのみまれてしまう Dick Diver は romanticism を貫徹できなかった、というのが、*The Great Gatsby* と *Tender Is the Night* の決定的な相違である。それぞれの作品は「最後の田舎者」と呼ばれた Fitzgerald が、modern の波をまともうけながらかううじて前に進んでいた時期と、完全に波に押し返されてしまった時期を象徴しているといえる。

#### 注

- 1 Roger Lewis, “Money, Love, and Aspiration in *The Great Gatsby*” in *New Essays on The Great Gatsby*, edited by Matthew Bruccoli (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), p. 44.
- 2 Dan Seiters, *Image Patterns in the Novels of F. Scott Fitzgerald* (Michigan: UMI Research Press, 1986), p. 80.
- 3 Kathleen Parkinson, *F. Scott Fitzgerald: The Great Gatsby* (London: Penguin Books, 1987), p.44.
- 4 Richard Lehan, *The Great Gatsby: The Limits of Wonder* (Boston: Twayne Publisher's, 1990), p.61.
- 5 F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (London: Penguin Books,

1984), p. 171. 以下この作品からの引用はこの版によりページ数のみを記す。

- 6 John Keats, “The Eve of St. Agnes” in *Keats: The Complete Poems* edited by Miriam Allot (London: Longman Group Ltd., 1970), ll. 74-76.
- 7 *ibid.*, ll. 55-59.
- 8 *ibid.*, ll. 231-239.
- 9 Bernard Blackstone, “The Eve of St. Agnes” in *Twentieth Interpretations of THE EVE OF ST. AGNES* edited by Allan Danzig (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1971), p. 40.